

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター
http://www.kwansei.ac.jp/RCC/index.html TEL:0798-54-6019

聖書解釈をめぐる熱い議論—聖書学セミナー
(2006年6月15・16日)

「聖書解釈—それでいいのか？」

商学部助教授・RCC主任研究員
辻 学

RCC内の研究プロジェクト「聖典と今日の課題」では、宗教における聖典の役割を検討すると共に、平和への貢献や人権擁護といった、現代社会における重要な働きを宗教が担っていくために、聖典解釈がどのような役割を果たすべきなのかを考えています。

昨年度は、キリスト教の中で聖書が従来どのように読まれてきたのかを批判的に検証し、聖書解釈の様々な可能性を考察することに研究活動の重点が置かれました。その成果を問う意味で開かれたのが、六月一日(木)～三日(土)の二日間わたる「聖書学セミナー」です。「聖書解釈—それでいいのか?」という、いささか刺激的なタイトルを冠したこの集まりは、事前に『キリスト新聞』や本学ホームページで紹介されたこともあり、会場となった関西学院会館ホールチャペルに多くの参加者を得ることができました。

一日(木)は、「旧約の部」で水野隆一氏(神学部助教授・RCC副長)の近著『アブラハム物語を読む』(新教出版社)の中の、イサク奉獻(創世記二二章)に関する解釈を、樋口進氏(RCC教授・副長)が論評するという形で議論が展開されました。

RCC内の研究プロジェクト「聖典と今日の課題」では、宗教における聖典の役割を検討すると共に、平和への貢献や人権擁護といった、現代社会における重要な働きを宗教が担っていくために、聖典解釈がどのような役割を果たすべきなのかを考えています。

昨年度は、キリスト教の中で聖書が従来どのように読まれてきたのかを批判的に検証し、聖書解釈の様々な可能性を考察することに研究活動の重点が置かれました。その成果を問う意味で開かれたのが、六月一日(木)～三日(土)の二日間わたる「聖書学セミナー」です。「聖書解釈—それでいいのか?」という、いささか刺激的なタイトルを冠したこの集まりは、事前に『キリスト新聞』や本学ホームページで紹介されたこともあり、会場となった関西学院会館ホールチャペルに多くの参加者を得ることができました。

一日(木)は、「旧約の部」で水野隆一氏(神学部助教授・RCC副長)の近著『アブラハム物語を読む』(新教出版社)の中の、イサク奉獻(創世記二二章)に関する解釈を、樋口進氏(RCC教授・副長)が論評するという形で議論が展開されました。



水野教授が展開する「文芸論的解釈」は、「聖書テキストを『純文学』と見なし、文彩や登場人物、プロットの展開といった、文学的な要素に注目しながらテキストを読み進めていく方法」(同書一〇頁)ですが、テキストから個々の読者が読み取る様々な解釈の可能性を広く認め、「正解」にこだわらないことを特徴としています。この立場に対して、テキストをその背後にある歴史的状况と併せて読むという「歴史的・批判的解釈」の立場から樋口教授が批判を加えたのですが、議論は、テキストの背後にある歴史的状况とは再構成が可能なものなのか、そのような状況を考慮しないとテキストが読めないのか、さらには、テキストが孕む矛盾をどのように受け止めればよいのかといったことをめぐり、旧約聖書学専攻の二人の間で、さらにはフロアからの意見も交えて繰り広げられました。

続く一日(金)は、「新約の部」で古代キリスト教思想を専門とする土井健司氏(神学部助教授)が、新約聖書学専攻の嶺重淑氏(神学部専任講師・RCC主任研究員)および辻学氏(商学部助教授・RCC主任研究員)に対して、聖書学の方法に関する疑問を呈示するという形で議論が始まりました。学問的な聖書解釈と、一般的に聖書を読むこととの間に相違や優劣はあるのか、礼拝説教と聖書学との関係をどう考えたらよいか、学問的には正しいと言えない「誤読」を、現実に役立つ解釈として肯定する可能性はないのか、さらには、古代・中世における聖書解釈をどう理解すべきかといった事柄をめぐって三者の間で熱い議論が交わされました。

セミナーの内容は何らかの形で文章化し、公表する計画です。多くの方から好評を得たので、次回は学外の研究者を招いて、同様のディスカッションを持ちたいと考えています。

開講 総合コース 「現代における《愛》の可能性—キリスト教の視点から—」 RCC主任研究員・神学部助教授 平林孝裕

現代社会には暴力や憎悪があふれ、人と人が愛し合えず、連帯することは困難に思えます。そのような時代にあって《愛》はいかに可能であるのでしょうか。過去、RCCは共同

研究班を組織して「現代における暴力」をキリスト教の視点から取り上げ、その諸相と起源を考察しました。さらに、このメンバーが中心となって現代における暴力と憎悪からの解放への端緒を見いだすことを期待して、あらたに研究班を組織し、キリスト教の視点から《愛》を問い直すために、二〇〇四年度から二カ年にわたる共同研究を行いました。

キリスト教は「愛の宗教」と

呼称されますが、実際にはその《愛》の形態は多様です。旧約(ヘブライ語)聖書における愛、新約聖書における愛、イエスの語る愛とパウロの語る愛にも差異があります。これらをイスラームにおける愛と比較することも興味深い研究です。近代に生きたパスカル、キエルケゴールはアトム化された市民社会における愛の理想を謳い、グローバル化した現代世界に生きるため、ティリッヒ、モルトマンは新し

い愛の姿を模索しています。また併せて、私たちに身近な結婚式で語られる《愛》が示唆する愛の現代人の生の諸相も議論となりました。

この研究成果は、「現代における愛の可能性(仮題)」として上梓する予定ですが、同時に、その成果を広く学生の皆さんと共有し、共に考えるために、総合コース「現代における《愛》」の可能性 キリスト教の視点から」として二〇〇六年度秋学

期(月曜・V時限)に開講することとしました。旧・新約聖書における愛、近代における愛の諸相を描き、現代人はいかに愛することができるかを、探究したいと願っています。

RCCを母体としながら、すでに「暴力を考える」が提供されていますが、センターでは、今後もキリスト教の視点から現代的な問題を鋭く衝く授業が提供できるように一層活発な研究活動を目指しています。

編集後記

スイング・ベル

RCC主任研究員
経済学部助教授
舟木 讓

「宗教センター」の建て替えによって建築中であつた建物が「吉岡記念館」として二〇〇六年四月に新しく開設されました。関西学院が上ヶ原に移つてきた当初に時計台と共に立てられた歴史のある宗教センターを建て替えるに際して、二十一世紀の関西学院に相応しいより豊かな中身を持った建物とするために何回も話し合いを重ねられ、多くの方々の協力によって「出会い」をテーマとした建物を設計・建築することとなりました。

そして、より豊かで多彩な「出会い」を実現するため、宗教センター関係学生団体である(宗)教総部・聖歌隊・チャペル・オルガン・パロック・アンサンブル・ハンドベル・クワイア・ゴスペル・クワイア(ower、voice)の各部室、ならびに(宗)教センター(神学部事務室)・人権教育研究室(キリスト教と文化研究センター)が入り、文字通り、多くの出会いを産み出す場所としての歩みが始めています。

また、「吉岡記念館」と「ラン

パス記念礼拝堂」の間のスペースも整備され、そのまわりには聖書に關係する植物も植えられました。今回、そのスペースをより多くの人々に知ってもらい利用してもらうべく愛称が公募され、四三六にのぼる多数の応募がありました。選考の結果「ベル・スクエア」という名称に決定いたしました。この名称に決定する理由となったのが、ランパス記念礼拝堂横に新たに設置された「スイング・ベル」の存在です。ベル、あるいは複数のベルが備えられた「カリヨン」は、キリスト教の歴史の中でも三世紀から五世紀にかけて礼拝の開始を告げる合図や、儀式の中で用いられ始めたと言われています。今回の設置もランパス記念礼拝



「出会い」をテーマとして企画設計された吉岡記念館(旧宗教センター)での様々な活動が始まり、はや4ヶ月が経とうとしております。

今回のニュースレターでは、これまでのRCCやキリスト教を軸とした学際的な研究成果がどのように展開、還元されているかについて、その一部について報告させていただきます。フォーラムのみならず各種研究プロジェクトや授業を通じて今日的な課題に關するキリスト教がどのように取り組んでいるのか、その一端を垣間見ただけは幸いです。(J・F)

第三十回 RCCフォーラム講演抄(二〇〇五年十月二十日)

内村鑑三の平和論

関東学院大学
文学部比較文化学科 教授

富岡 幸一郎



イスラエルの地で

二〇〇〇年の九月はじめに、イスラエルを旅する機会がありました。はじめてのイスラエル訪問でしたが、九月二日にエルサレム城内に入り、巨大な岩の壁に向かって祈禱書やトーラー(聖書)を持って熱心に祈りをささげるユダヤ人の集団を、私は少し後方から見つめていました。その日は、折りしも土曜日でユダヤ教の安息日(シャバット)でした。人々は一切の労働から解放され、神の平安(シャローム)を享受する日です。シャロームは平和を意味しています。しかし、その後この地で起ったのは、憎しみと流血の連鎖です。私が訪れた後、九月二十八日に当時の野党リクードの党首で

あつたアリエル・シャロン(その後イスラエル首相となり、タカ派路線から昨年末に転換し、パレスチナとの和平交渉に入るうとして病に倒れた)は、イスラム側の聖地に警察官を多数引き連れて入ったために、衝突が生じ、以後パレスチナ紛争は泥沼の状態へと陥ったのです。そして、翌二〇〇一年九月には、アメリカで同時多発テロ事件が起こり、アフガニスタン、イラクと戦争が広がっていききました。二十一世紀は、前世紀のふたつの大戦の反省から、平和の祈りではじまったのですが、今日われわれが直面しているのは、テロリズムと報復戦争というあらたな「戦争の現実」です。

日本は戦後六十年余り、一國平和主義でやってきました。しかし、現実には冷戦構造のなかで、アメリカの巨大な軍事力の下にあつたわけです。文明は平和をもたらさず。その期待と希望は裏切られ、むしろ文明そのものが結果的に暴力をもたらすという矛盾を示しています。また、本来は「平和」を求め「宗教」が、人々の争いの原因となったり、あるいは争いのために利用されたりしています。宗教原理主義という言葉がそれを象徴しています。こうしたなかで、イスラエル、パレスチナという土地は特別な意味を有しています。それは実際にこの地で紛争がくりかえされているということだけでなく、ここには人類の歴史とつぎつぎと重要な一神教の生まれた場所だからです。ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教です。紀元前二〇〇〇年に、アブラハムの登場からはじまったユダヤ民族は、近代的な民族概念の成立よりはるかに以前の出来事であり、そこに起つた宗教革命と

内村鑑三の非戦論

内村鑑三は文久元年(一八六一年)に生まれ、明治のはじめ札幌農学校に学び、新渡戸稲造らとキリスト者となった人です。昭和五年に没するまで無教会のキリスト者として、多くの著作を遺しましたが、日露戦争の際には非戦論を展開しています。しかし、内村の非戦論は、ただ日露戦争という自国の出来事のみ向けられていたものではありません。それは「戦争のない状態」としての「平和」を求めたものでもありません。明治三十五年(一九〇二年)

のクリスマスの講演「平和と争闘」で、内村は「国と国との間のみ限」って「戦争」を考へるだけでなく、階級の間の対立社会や家庭や個人の「折衝と反目」のことも指摘します。《今眼を転じて階級と階級との争いより個人と個人との折衝と反目を視ますればこれまた実に惨憺たるものであります。……子を恨む親、兄を憤る弟、弟を嘆く兄、一家清乱、社会紛乱、実に見るに忍びざる状態であります。世は平和どころではありません、鮮血淋漓たる戦場でありませぬ》
内村が願つたところの「平和」は、ただこの「戦場」が一時的に消えてくれればよいというものではなかつたのです。彼が祈り願つたところの「平和」とは、人間の罪からの解放であり、この天地万物の創造主たる神との、人ととの和解です。そのような意味での、人間存在の根本的な救いといふことでした。それは聖書イエス・キリストの信仰が彼にもたらした根源的な平和論です。それはまさに一神教のもたらしたものに他なりません。内村は日本人として、この一神教(ユダヤ・キリスト教)のもつ深い意味と思想を理解しました。理解しただけではなく、それを自

再臨信仰と歴史の現実

分の生涯において生きて実践しました。自存と自立の精神によつてそれを貫きました。この内村の「運動」は、人々にも大きな影響を与えています。おそらく今日のキリスト教の枠組では考えられないほどの影響力をもつたといつてもいいでしょう。

内村鑑三の非戦思想は、その後大正七年(一九一八年)頃からのキリスト再臨の信仰によつてさらに深められていきます。

《それは吾々の謂ふ平和とは無事との謂いではありません。平和は神の意志と人の意志との調和であります、直ちに神の霊を我が心に寓すの歡喜であります。あれは実に神より出て人のすべの思ふ所に過ぐる平安(ピリピ書四章七節)でありまして、神はかかる平安を我らに下し給うたためにキリストを世に降し給うたのであります。我らは平和を世の安逸を望む者がなすよつに解してはなりません。……》

キリストの再臨とは、イエス・キリストがその肉体を持って文字通りこの地上に再来することです。新約聖書にこのことは記されています。(使徒言行録一章六―十一節 コリントの信徒への手紙一五章五十一―五十八節 ヨハネの黙示録二十一章一―四節その他)再臨とは、神の約束であり、人間と万物の救いの成就、完成の時です。キリスト教信仰は、このキリストの再臨をして終末の時と呼び、そのとき死者もまた復活し、救済の栄光に授かることができるというのです。

内村は近代人としての理性と進化論などの科学的知識をもつていた人です。その内村が、近代のキリスト教があまり語らなくなつた終末論を積極的に語つたのは、ここに聖書の核心があることを信じたからです。そして、それはただ聖書研究の深まりや個人的な信仰の深まりだけ

ではなく、当時の歴史の現実が大きく関わっていました。

つまり、第一次大戦という欧州を戦場に、アメリカも参戦した大戦争に直面した内村は、人間や国家の力では、最終的な絶対的「平和」は決してやつてこないということを感じたからです。人類愛やヒューマニズムの思想からすれば、それは絶望に陥る他ありません。内村も同じように絶望に陥り、そこから再び聖書に問いたずねることをしました。キリスト教の原点、本質を改めてさぐることをしたのでした。そして、近代主義の流れのなかで個人の精神と内面の方へ傾いたキリスト教を批判的に乗りこえることをなしました。終末論を再発見したので

す。ちょうど同時期に、ヨーロッパではイスの若き牧師であつたカール・バルトが、使徒パウロの「ローマ人への手紙」によつて、終末論をあらたに神学的に呈示したのでした。

また内村鑑三は、パレスチナの地からはるかに遠い日本にあつて、当時二十世紀の最初の二十年間に急速な昂揚を見た、ユダヤ人シオニズム運動に注目しました。紀元七十年に祖国を追われたユダヤ人は、漂泊と迫

害の果てに、シオンの地へ、イスラエルへ帰ろう、そこで再び祖国をつくらうという運動をはじめたのです。それは二千年の歴史のスパンのなかの、巨大な地殻変動でした。内村はそのことを見抜き、このユダヤ人のパレスチナ復帰の出来事にこそ、聖書の預言の真理の、その啓示の具体的なあらわれがあると考へたのです。啓示とは、そもそも覆いを取り去るということですから。内村はシオニズム運動をたんなる近代国民国家のナショナリズムの動きとしてだけでなく、むしろ啓示的な出来事として捉へたのです。それは、近代的な実証的な歴史主義の覆いを取りはらつてみなければわからないのです。

旧約聖書のエゼキエル書三十七章に、朽ちた骨からの肉体のよみがえりの奇跡が記されていますが、内村が二十世紀のユダヤ人に見たのは、まさにエゼキエルのな意味における復活でした。おそらく、これは近代的精神においては根本的に異質な、驚異に満ちた出来事です。そして大切なのは、この出来事が、その後第二次大戦下のユダヤ人のホロコースト、一九四八年五月十四日のイスラエル国家の再建、さらには今日まで続くパレ

「主の山に登り、ヤコブの神の家に往こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。
「主の山に登り、ヤコブの神の家に往こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。
主の教えはシオンから
御言葉はエルサレムから出る
主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かつて剣を上げずもはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。》
(イザヤ書 二章三―五節)

